

---

# とある無敵の多重能力者

ゆっぴー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある無敵の多重能力者

### 【Nコード】

N8143Z

### 【作者名】

ゆっぴー

### 【あらすじ】

テンプレでとあるの世界に転生したレベル6で聖人で多重能力者で世界最高の魔術師である神野秀也が原作介入をする話です。

この作品は、作者の処女作で駄文です。さらに不定期でオリ主最強ですが、「それでもいい」とっていう心優しい人は読んで下さい。

## プロローグと第一話（前書き）

はじめて、ゆっぴーです。

この作品は処女作で駄文の不定期です。

故にキャラ崩壊があるかもしれませんが。

「それでもいい。」っていう方は、このままお読み下さい。

## プロローグと第一話

突然だが、俺は死んだらしい。どちらかと言うと夢であって「夢じゃあないぞ。」… 夢ではないらしいので、本当に死んだようだ。

神「本当にすまない。お主は、家庭科の調理実習中に、こっちの者のミスで全身火だるまになって死んでしまったようじゃ。」

なるほど、これがいわゆるテンプレというやつか。そういえばなんか最期すごい熱かった気がする…。

神「というわけで、お主には、『とある』の世界に転生してもらうことになった。」

あつ、ちなみに俺の名前は、神野秀也（14歳）だ。そして目の前に、神一（？）がいる。

神野「何が」というわけで、『かわかんないですけど、別にその世界好きだったからいいですよ。あと、特典って何か付きますか？』ちなみに俺は禁書のアニメしか見ていないが、『スクール』が反乱を起こすことや、第三次世界対戦があることは、友人から聞いている。

神「全然大丈夫じゃ。まあ、ある程度は才能でどうにかなるが、それ以上はそれなりに苦労してもらうがの。」

…それって、特典にならないので「なるぞい。」

あつ、心読まれた。

神「努力してもどうにもならないことも、強制的に努力させてその力を身に付けさせてやると言っておるんじゃ。立派な特典じゃろっ?」

…なるほど。

神野「では、とりあえず聖人にしてください。あと、レベル6で多重能力者 デュアルスキル で、さらに十万三千冊の魔導書の記憶とあり得ないほどの天使の力 テレズマ をください。」

神「天使の力と聖人は、才能でどうにかしておくが、あとは努力するんじやの。まあ、原作開始までには、どうにかしておくぞ。」

それなら、問題無さそうだな。そういえば何でとあるの世界なんだろう?

神「勿論、儂の好きな世界じゃからに決まっておろう。もう言いたいことはなさそうじやの。では、第二の人生を存分に楽しんで来るがよい。」

そして俺の目の前が真っ暗になった。

はい、こんにちは。無事転生して今幼稚園の年長になった神野

秀也改め、高田直人だ。

まあ、俺の転生後直ぐの生活なんか誰も知りたくないと思うから飛ばさせてもらおう。とりあえずすんごい恥ずかしかつただけ言っておこう。

ちなみに今、俺にはいつも一緒に遊んでいる友達、というか妹みたいなのがる。それが、「直人お兄ちゃん！」「ぐふっ！！」いま俺の鳩尾に頭突きを食らわしてきた佐天涙子である。

高田「んー、涙ちゃん（なみだちゃん）どつたの？」

佐天「えぐっ、あのね、ひくっ、おんなじクラスのね、ずずっ、高良くと、吉田君がね、うぐっ、いきなりわたしのこと蹴つてきたの、うわーん！！」

このように、かなりの頻度で俺に泣いて来るから、「涙ちゃん」って呼んでいる訳だが、今はそんなことどうでもいい。俺の妹を泣かせたやつと少し O H A N A S H I I しなくては！！

ちなみなにこんな風に涙ちゃんを泣かせたやつは、年上だろうが聖人の力でボコつって謝らせている。決してロリコンなんかじゃないんだからな！………今のは忘れてくれ。

まあ、俺はこんな感じで第二の人生を存分に楽しんでいる。

くその夜

高田直人の父（以降父）「お前ももうすぐ一年生なんだし学園都市に行ってみないか？」

高田直人（以降高田）「うん、いいよ！！あそこなんか楽しそうだし。（原作介入したいし。）」

おっしやきたああ！！！！やっと自分の能力がわかるぞおお！！！！明日、涙ちゃんの説得大変そうだな。うん、頑張ろう…

（翌日）

高田「俺、来年から学園都市に行くことになったんだー」

と過去（前世含む）最高のテンションで話す。

佐天「えー、直人お兄ちゃんと離れたくない！！わたしも一緒に行く！」

と若干涙目になりながら言う。

高田「まあ、行きたいんだっただらまず三年後の小学生になってからだな。それに、一生会えない訳じゃ無いし。あとすぐに泣かないようにすることだな。最後に、これを俺だと思って大切にしてくれ。」

と言って、白い花の髪止めを渡す。

佐天「うん！！わたしもう泣かない！！」

なんとかなだめることができた…

## ブログと第一話（後書き）

感想評価、どんどん下さい。

しかし返信できないかもしれません。

あと批判は、できるだけオブラートに包んで下さい。

第二話 置き去り チャイルドエラー (前書き)

まさかの連続投稿です。

## 第二話 置き去り チャイルドエラー

確かに自分の家は裕福では無いとは思っていた。しかし自分がまさかあの置き去り チャイルドエラー になるとは、夢にも思わなかった。

基本的に置き去りには、二通りある。一方は、まともな施設で衣食住が保証され同じ施設の友人たちと、まとも暮らせる子達。もう一方は、木イイ原アアクウウン的な方々に、「限界？なにそれ、食えんの？」という感じで、ぶっ壊される、またはそれに近いことをされる子達。そして残念ながら、俺は後者だった。

研究員「00044番、薬の時間だ。」

これは、俺のことだ。薬の仕組みはよくわからんが、それを静脈に1日三回入れられる。もう何カ月、いや何年間もこれをやっているが、全然慣れない。今でも時々意識を失うときがあるし、子供が死ぬのだってざらにある。

ただ、そんな生活の中で唯一良いことがあったとしたら能力者になれたことだ。ちなみにレベル4である。どんな能力かというと、

研究員「では00044番、この紙の模様を当てろ。」

俺「星です。」

研究員「いいだろう。」

透視能力 クリアボイランス ではなく生体電気や信号から相手の

考えていることを読み取る  
情報覗見 ノンプライベート (研究員命名) である。もうすぐレ  
ベル5になると言われている。

レベル5になると半径1km以内の人間、機械を自由に操れて、さ  
らに能力者の自分だけの現実 パーソナルリアリティー の読み取  
り、使用が可能になるらしい。つまり擬似的な多重能力者 デュア  
ルスキル になるということだ。

〈数カ月後〉

レベル5になれた。最近では、慣れてきて一気に水と火と氷を出しな  
がら、空間移動が出来たりする。  
そんなある日、

研究員「お前は、これから違う研究所にいらつてもらつ。」

この言葉で、俺の人生は、より狂わせられていく……

〈数日後〉

研究所「一応、テメーらにも実験内容を教えてやる。これは、第一  
位の自分だけの現実を直接テメーらの脳ミソにブチこんで多重能力  
者を作るつー実験だ。ちなみに明白の四月計画つーんだ」

いや、待て。多重能力者つて脳が耐えられないから不可能じゃない

のか？子供5000人位集めても無理だろう、どう考えても。

実験結果は、一応成功で俺一人だけ生き残った。しかし実験中に暴走して、自分や周りの子を燃やしたり、発狂した子が続出し、唯一の成功例の俺も反射しかできないので、この実験は凍結となった。

↳さらに数カ月後

着々と能力を伸ばしてきたところで、新しい実験に参加することになった。

その名も超能力製造計画 レベル5ファクトリー

俺の能力の一つの演算補助と強制演算によって、能力者の演算能力を底上げしレベル5を作るという計画。

これも明白の四月計画とほとんど同じく300人中298人が暴走二人は成功したが、反乱を起こしたため、凍結となった。

この時実験の責任者に「実験に参加したくない。」と伝えたら、「その時は毒ガスで、君と実験台 モルモット を殺すしかない。」と言われて、仕方無く実験に参加した。

ちなみにその二人の能力は自分の体を操る身体掌握 ボディーコン

トローラー と空間移動系の固定座標 フリーポイント で俺の一方通行の能力は絶対守護領域 ミラーコート (研究員命名) となっている。

二ヶ月後

この時に俺のために最もなって、俺が最も嫌いな実験が行われた。

第二話 置き去り チャイルドエラー (後書き)

なぜこんなに話が重くなった…

冬休みの補習授業なんて消えてしまえ!!

感想評価誤字脱字の指摘お待ちしてます。

第3話 親友とレベル6（前書き）

ああ、本当に重い。

### 第3話 親友とレベル6

ある日一樹形図の設計者 ツリーダイアグラム がとある” 予言”  
をした。

『学園都市第一位―一方通行 アクセラレータ が、第三位―超電  
磁砲 レールガン を128通りの方法で、また序列無しの一情報  
視見 ノンプライベート が500人のレベル5を、殺害すること  
でレベル6になる。』と

そんなことも知らず俺はとある施設でいつもと同じような実  
験をしていた。しかしいつもの施設と違って友達というのができた。  
彼の名前は火野紅介。レベル4の一発火能力者 パロキネスト ど  
んなやつかというと、

火野「俺がレベル5になったら、悪い研究員達を全員やつつけ  
て一置き去り チャイルドエラー 達をみんな保護してやるんだ！  
！」

正義感の強い奴だった。能力と同じくらい暑苦しくて。そんな  
俺は、

俺「レベル5なんてそうそうなれるもんじゃ無いし、やりようよっ  
てはこの町じゃレベル5でも直ぐ死ぬかもしれないし。それにこう  
いった研究が無かったら、学園都市の技術の成長は止まつちまうだ  
ろ。」

冷静というか諦めきっていた。しかし俺は何故か火野と馬が合いずだと一緒に話していた。

そんなこんなしているうちに、新しい実験が始まった。

研究員「今回の実験は情報視見が演算補助でレベル5を作りそれを殺す、つてのを500回ほどやってもらう。もちろん拒否したら、ここにいるみんなに消えてもらう。どっちみち処分されるんだから、有効活用してやれよ。」

頷くしか無かった。そして神に力を望んだ自らの浅はかさを呪った。

そして実験当日、最初の相手は火野だった。

火野も自分の状況を把握していた。だからこそ本気で俺を殺してきた。しかし相手をレベル5にしても反射は生きているので火野の放った炎は、自分の左手を溶かした。

火野「があああ！！」

火野が呻いている隙に一瞬で近づき腹蹴り飛ばす。そして火野が倒れた瞬間に馬乗りになり、拳を構える。

俺「何か言い残したことはあるか？」

火野「レベル6になっても自由に生きる！！世界中の全員を守

れとは言わねえ。だから！自分の守りたいやつは必ず守れ！！」

俺は泣いていた。

俺「わかった。ありがとう、あとごめん。」

こうして俺の学園都市に来て初めてできた親友は俺によって殺された。

しかし実験はそんな感傷に浸らせることなく進められていく。

20人位で何も感じなくなった。

100人位で、自分の能力が強くなっていることを自覚した。

300人位で、実験を止められる力を得た。

「でも止められなかった。その時の俺は親友の「レベル6になれ。」という言葉に縛られていた。

そして500人目で、俺はレベル6になった。

嬉しくないことは、無かった。後悔もしていない……いやしてはいけなかった。ただ　　「空しかった。人の犠牲の上に成り立つ力に疑問をもった。

しかし俺は直ぐに行動を起こした。まずは、この実験に関わった研究員を潰した。

そしてこの実験に関するデータを跡形もなく消した。

そして俺は初めて研究所の外を”自由に”歩いた。

### 第3話 親友とレベル6（後書き）

感想評価誤字脱字どんどん下さい。

ストーリーのリクもあればどうぞ！！（答えられないかもしれませ  
ん）

第一章ももう少し続きます。

主人公のいまのスペック（ネタバレ有）（前書き）

重い話は終了!!

## 主人公のいまのスペック（ネタバレ有）

名前；神野秀也

自分を捨てた親からもらった名前は、名乗りたくないから、前世の名前に変えた。ちなみに前世の親には感謝している。

レベル6だが、アレイスターに直談判し、レベル5の第六位を名乗っている。しかしその情報すら改竄し、皆にはレベル0と認識されている。

容姿；能力のせいで、ホルモンのバランスが崩れ、髪の毛は灰色に、目は右だけ赤のオッドアイに、顔全体もかなり整っている。身長は176cm。また、両耳には、逆十字架のピアスを付けて右手の人差し指、中指、薬指には、剣、槍、盾が彫つてある指輪をしている。

能力；一情報視見 ノンプライベート 一絶対悪夢 ジ・アブソリュート

半径100km圏内の生物、機械の信号を読み取り、操る。

応用；演算補助；対象の演算を助ける。レ

ベル0二十人をレベル5に

できる。

強制演算；対象の演算能力を底上げ

する。やり過ぎると対象

が危険。

強制労働：自分の生体電気を操って

体のリミッターを外す。

現実取得：周囲の能力者の自分だけ

の現実を読み取ってその

能力を使う。

絶対悪夢：相手の信号を操って五感に訴えかける幻覚を見せたり、相手を動けなくする。

完全記憶能力：自分の脳の信号を操作していつでも思い出せる。

— 絶対守護領域 ミラーコート —

絶対標識 オールディレクション

半径100m圏内のすべてのベクトルを操る。また、触れている物のベクトルの大きさも1% 10000%にできる。

性格：フリーダム。正義の味方ではないと自覚している。自分と友人のためならなんでもする。

主人公のいまのスペック（ネタバレ有）（後書き）

ゆっぴー「これから次回予告をします。」

神野「気が付いたら原作開始一年前！まあ、

ゆっくり休んで…いられなかった！！とりあえずアレイスターとか  
一方通行に会わなきゃな。っつーわけで次回」

ゆっぴー、神野「第4話無敵の邂逅！！」

## 第4話 レベル6の邂逅(前書き)

なんかお気に入り登録してくださった方が九人も…!!

本当にありがとうございますm(\_\_\_\_\_)m

そして、一方通行のキャラ崩壊が…

## 第4話 レベル6の邂逅

研究所を出たのはいいが、いくあてと金がない。…困った。金が無いからホテルにも止まれないし、かといって野宿すると補導される。今は警備員アンチスキルのお世話になりたくないしな。

そんなこんなで、悩んだ結果アレイスター・クロウリー統括理事長に相談（脅迫）することにしよう。よし、思い立ったが吉日。早速空間移動テレポーターをパクって窓のないビルにjump！

…窓のないビルにて…

今俺の目の前には男にも女にも子供にも老人にも聖人にも囚人にも怒っているようにも笑っているようにも見える人（？）がいる。

アレイスター「何の用だ。一絶対能力者（レベル6）の高田直人。」

俺「まず、俺の名前は神野秀也だ。あと学園都市最強を名乗ってっとなんな奴らに襲われっから、レベル5の第6位にでもしといてくれ。まあ、あと衣食住と金を保証してくれ。これじゃあ生活出来ん。」

アレイスター「ふむ。しかしそれをする事によって私に利益はあるのか？」

俺「無いな。「では…」でもしてくれ無かったら、全力で学園都市を壊す。一今の俺（レベル6）なら、その程度朝飯前だな。」

アレイスター「それなら仕方ないな。とりあえずレベル5としての奨学金と口座、さらに今までの実験の謝礼を出そう。それで食べ物と服を買つといい。家は第19学区の空き家を使つといい。これがクレジットカードだ。」

俺「まあ、それでいいや。んじゃ、家探しに行くわ。」

と言つて俺は外にテレポートする。

とりあえず服と携帯電話を買つたし、飯も食つた。それじゃそろそろ家探してますか！

と思つてつと前から白もやしが来てるし。」

一方通行「ああ？テメエ、学園都市第一位にケンカ売るたアイイ度胸してんじゃねエか。」

俺「あー、わりい。思わず心の声が出てきてたわ「よけエワリイよ！！」すまん、すまん。ところでお前の実験つていつやるんだ？」

一方通行「ああ、アレかア。そんなら明日からだぜエ。ツツーかオマエ何モンだ？なんで実験のことしツてやがんだア？」

俺「まあ、実験の関係者つてとこかな。」

嘘は言つてない。俺のは一方通行のデモンストレーションっていう側面があつたらしいしな。

俺「そんなことはどーでもいいんだけどさ。いい気分じゃねーぞ？

誰かを犠牲にして力を得るっつーのは。実験を拒否出来る力があるんなら止めとけ、そんなもん。それにもしお前が、人との繋がりか欲しくて、でも人を傷つけたくなくて力が欲しいんなら、俺が友達になつてやるよ。」

そう言つて俺は一方通行の肩をポンツと叩く。

一方通行「反射は生きてる…？テメエ、ナニしやがツた!？」

俺「能力使つた。んじゃ、お前の携帯に俺の番号とメアド（能力で登録しといたから。いつでも連絡くれよな。じゃあな（＾o＾）／」

そう言い残して、俺はテレポートする。

～一方通行 side～

オレは、明日に大事な実験があるのにも関わらずコーヒを大人買いしていた。すると前にいた、男が

「……つと前から白もやしが来てるし。」

ケンカ売ツてキヤガツた。

一方通行「あア？テメエ、学園都市第一位にケンカ売るたアイイ度胸してンじゃねエか。」

俺「あー、わりい。思わず心の声が出てきてたわ「よけエワリイよ

「!!」すまん、すまん。ところでお前の実験っていつやるんだ?」

「ンア? コイツ実験の関係者かア?」

一方通行「ああ、アレかア。そんなら明日からだぜエ。ツツーかオマエ何モンだ? なんで実験のことしッてやがんだア?」

俺「まあ、実験の関係者つてとこかな。」

「ヤツぱりなア。そしてコイツは続ける。」

俺「そんなことはどーでもいいんだけどさ。いい気分じゃねーぞ? 誰かを犠牲にして力を得るつーのは。実験を拒否出来る力があるんなら止めとけ、そんなもん。それにもしお前が、人との繋がりが欲しくて、でも人を傷つけたくなくて力が欲しいんなら、俺が友達になってやるよ。」

「んなコト言ッてコイツはオレの肩を叩いてきヤがッた! ?」

一方通行「反射は生きてる...? テメエ、ナニしヤがッた! ?」

俺「能力使った。んじゃ、お前の携帯に俺の番号とメアド登録していたから。いつでも連絡くれよな。じゃあな( ^o^ ) /」

「そう言ッてヤツは、突然消エヤがッた。多重能力者かア! ? アイツはア! ?」

「その後携帯を見てみッと一件だけ知らネエナマエがあッた。」

「神野秀也... ナニモンだア? アイツは?」

一方通行 side end

神野 side

さーで、皆さん。俺は今第十学区名物のスキルアウトに囲まれている。ただ、少し普通とは状況が違う。それは、

スキルアウト「このリーダーになってください、兄貴  
！」「」

こんな感じだ。まあ、あらすじを説明すると、

第19学区でなんか不良にボコられている男発見。

不良をボコって男救出。

男は実はスキルアウトで、男の仲間に歓迎される。

頼まれて、そいつらと敵対するスキルアウトを壊滅させる。  
(五分で能力未使用)

なんかリーダーになってくれと言われる。

こんな感じだ。

俺「別にいいけど俺、能力者だぞ？しかもレベル5。ちなみに序列は六位な。」

スキルアウト「それでも構いません！！兄貴！！」「」

⌊

…なんか舎弟が出来てしまったようだ。  
(50人位)

#### 第4話 レベル6の邂逅（後書き）

感想評価誤字脱字の指摘お待ちしてます!!

ここで読者の皆さんに質問ですが、この小説の字数を増やしたほうが良いでしょうか？コメント、感想に書いてくださいm（）（）m

一方通行「次は、神野が能力を本格的に使っらしいなア」

ゆっぴー、神野「次回第5話 原作直前の休暇」

**第5話 原作前の休暇（前書き）**

サブタイトルの意味不明

こんなですが過去最長。

一応自信作です。

それでは、どうぞー！！

## 第5話 原作前の休暇

皆さん、こんにちは。少し前にノリでスキルアウトのリーダーになってしまった神野秀也だ。今俺の組織は、駒場のとこと、二年前に死んだ黒妻のビッグスパイダーと張り合う程の組織になっていて、いま、第19学区をまとめている。

ちなみに俺の組織にはいくつかルールがある。

- 一、強引なナンパの禁止。
- 一、少数相手に大人数で行かない。
- 一、無能力者相手に能力は攻撃に使わない。
- 一、一般人にケンカ売るな。

大体こんなもんだ。あと、メンバーは俺がレベル6であることを知っている。また、俺の能力の強制演算と演算補助を軽く使って、メンバーの全員が能力者になっている。ちなみにレベルは、殆どが2で、高いやつで3だ。当時は、皆「もつとやれ」って言ってたが、翌日に脳を使い過ぎたことによる頭痛とやり過ぎたら死ぬと言ったらそんな声もなくなった。

大分話が逸れたが、いま俺たちは駒場んとこにケンカをしに行こうとしている。理由？暇だからに決まってるんだろ。だってあいつ俺が強いらしいってだけで、ハードテーピング使ってくるし。あと、第7位の攻撃耐えるやつ、モツ鍋って名前の、がいるしな。まあ、暇潰しにはうってつけの面白い奴らなんだな。

今駒場の奴らとのケンカが終わったところだ。あ？内容？簡単に説明すると俺と駒場が、7分くらい殴り合ってたら、あいつが全身肉離れしたとか言ってダウン。そこから一気にこっちが優勢になって圧勝で終わった。

そしてまた新たな問題が来ている。それは、

？「こんなに相手をボコボコにするとは根性の無い奴らだな！！くらえ必殺、すごいパーンチ！！」

ドゴオという大きな音を出して俺は隣の廃ビルに叩きつけられ、ビルに蜘蛛の巣みたいなヒビが入る。

俺「あー、お前ら駒場の奴ら連れて今すぐ逃げろ。こいつは、学園都市のレベル5第7位、ナンバーセブンこと削板軍霸だ。俺とこいつがケンカしたら周りが壊滅するから、巻き込まないように早く逃げろ。」

と言ってこいつらを逃がす。

削板「ほう兄ちゃん、舎弟を逃がして俺に一騎討ちを挑むとは、根性あるじゃねえか。兄ちゃん名前は？」

俺「神野秀也。」

それだけ言って、俺は能力を使って思いっきり地面を踏みつける。

すると周りにあったビルの全てが崩壊し、その破片が全て音速を超えてら削板に迫る。それをあいつは、

削板「根性おおお！！！！すごいパンチラアアッシュツツツ！！！！！！」

全て粉碎した。

俺「へー、それって連発出来たんだ。」

削板「うおおお！！！！根性があれば何だって出来る！！そして今のは、中々根性のたる攻撃だったぞ！！」

そう言ったかと思うとあいつの背後でいきなりバァンと爆発が起り、モクモクと七色の煙があがる。

俺「ふーん、ありがと。」

そう言つて刹那の速さであいつに近づき思いつき蹴りを食らわそうとする。それをあいつが、

削板「超すごいガード！！！！！！」

解析不能な壁を生成して防ごうとする。しかし今の俺の蹴りは、聖人の全力でさらに生体電気の操作とアドレナリンを強制的に大量に分泌させ、なおかつ足のベクトルとスカラーを操作によって、最早蹴りのカテゴリーから外れた破壊力を秘めている。だから、あいつの盾ごとあいつをぶっ飛ばし、あいつは何個かの廃ビルを貫通して止まった。

…うん、あいつは気を失ったるみたいだけど、生きてるな。まさしく理解不能だな。ちなみに俺たちが（主に俺）ぶっ壊したビルは、使い道がなくなっ取壊す費用ももつたと言われ放置されている建物だったから賠償は請求されなかった。ただ駒場の奴らには、怒られた。

（3月）

（白井黒子 side）

わたくしは今固法先輩が銀行でお金をおろそうとしているときに、同い年の初春に偶然会った話をしているところですよ。

初春「よく知らない人のことをそんなに言えますね…」

白井「そう言えば、大体失敗して寂れた第19学区の方が生徒の多い第7学区より治安がいいというのは、おかしいですよ。」

初春「あー、それはなんか第19学区をまとめているスキルアウトのリーダーがすごい強くて悪さが出来ないかららしいですよ。」

白井「知っていますの。でもこの前あった謎の廃ビル大量崩壊事件の犯人が、その殿方という噂がありますの。」

初春「そうだったんですか！？もしそうだとしたら、その人って相当高位の能力者なんですよーね。」

（白井 side end）

さて俺たちは今第7学区のゲーセンを巡る為に銀行で資金を得ようとしている。ちなみに俺たちの組織の活動資金は俺たちの奨学金だったり、スキルアウトにわざとケンカを売られて「迷惑料」を貰っ

たりしている。そこで待ち時間の間爆睡していると、なにやら女の子が叫んでいるのが聞こえたので、め目を開けると、

破壊された警備ロボ、大怪我を負って倒れている高校生の女と、大怪我を負いながらも明らかに「銀行強盗」っていう感じの男に立ち向かっている女の子。…うん、明らかに銀行強盗だね！よし、ここは、なんか期待の眼差しでこっちを見ている舎弟たちの為にも少しボケをかますか！！

そう思い、俺は銀行員に近づいて、

俺「そろそろ俺の番ですか？口座から、10万おろして下さい。」

金を要求した（合法的に）。ぷぷっ、銀行員の女の人めっちゃ困ってるww

銀行強盗「おい！ぶざけてんじゃねーぞ！！！」

とか言っつて鉄球を投げってくる。

んー、鉄球にかかる力を強制的に釣り合わせて等速直線運動させるっていう能力か、でも残念、俺の能力は、オルディレクシヨン物理系最強だからそんなのは、通用しないんだよ！

俺「いらん、そんな鉄球。」

そう言っつて向かって来た鉄球にデコピンをする、するとその鉄球が目で見えない速さでその男の横を通りすぎ、後ろの壁に刺さる。

銀行強盗「ちっ！なら複数の鉄球ならどうだ！？」

と叫んでこつちに10個位の鉄球を投げってくる。それを俺は近くの空間移動テレポーターを使って全部男の背後に飛ばす。

男は、自分背中に刺さりそうになった鉄球にかかっている能力を解除するが、その隙に男に近づき膝蹴りを溝尾に食らわせる。そして男は一瞬うめき声をあげて、意識を手放した。

〔白井side〕

自分がでしゃばつたせいで一時はどうなるかと思いましたが、突然現れた殿方のお陰で助かったですの。

助けてくれた殿方「怪我、大丈夫？」

白井「ええ、貴方のお陰で何とか助かりました。ありがとうございます。」

助けてくれた殿方「それは良かった。それじゃあ俺はもう行くわ。お前ら、行くぞ。」

白井「ちょっと待って欲しいですの!」

わたくしの制止も聞かずにその殿方は、仲間たちとテレポートしてどこかに行ってしまったですの。

途中のは一体何だったのでしょうか？能力を二つ使っているように見えましたか…。



## 第5話 原作前の休暇（後書き）

感想評価誤字脱字の指摘お待ちしております。

白井「時は変わって、もうすぐ夏休みですの。そんなときに、四ヶ月にわたたくしを助けてくださった殿方と雰囲気が似た殿方が、風紀委員として、だい177支部にやって来たのですの。」

ゆっぴー、神野「第7話（超電磁砲の）原作介入」

第6話 (超電磁砲の) 原作介入(前書き)

やっと冬期補習授業が終わったー！

過去最長です。それでは、どうぞ。

## 第6話 (超電磁砲の) 原作介入

俺は暇潰しに、研究所をぶっ潰して、置き去りの子達をたすけたり、チャイルドエラー スキルアウトのメンバーの皆と遊んでいるうちにもうすぐ夏休みっていう時期になってしまった。ちなみに暗部の『アイテム』っていう組織にあつて、麦野とか言うレベル5と知り合った。あつちは、俺のことを『力の強いレベル0』と思っっているが。

そんなこんなで、俺は突然学園都市の統括理事長に呼び出しをくらった。ちなみに俺のスキルアウトのメンバーの多くは能力者になつてから、学校に行くようになって、どきどきこっちに顔を出す。と言つた感じになっている。

あと、俺は学校に行っていない。何故なら俺はどここの学校に所属しているかわからないからだ。

「窓の無いビル」  
アレイスター「神野秀也、君には第7学区でジャチメント風紀委員をやってもらう。」

「……は？」

俺「……なんで？」

アレイスター「最近第7学区で能力者による犯罪が増えてきて、彼らの手に負えないらしい。だから君には助っ人として、風紀委員になつてもらおうと思つたのだ。」

俺「でも、俺はレベル6どころかレベル5の肩書きすら隠して今は、レベル0扱いされているぞ?」

アレイスター「例え君がレベル0だと認識されたとしても、君の戦闘能力なら直ぐに犯罪の抑止力としての役割を果たすだろう。」

俺「ふーん…。まあ、こんなくだらんことで、学園都市と全面戦争もしたくないから、別にいいや。」

アレイスター「そう言ってもらえると、助かる。では、君は明日から、柵川中学校に通ってくれ。あと、風紀委員第177支部に所属してもらおう。」

俺「わかったけど、家とかはどうするんだ?野宿とかは、嫌だぞ。」

アレイスター「わかっている。ここの空き地を与えるから、好きな家を作ってくれ。」

そう言ったかと思うと目の前に地図が、現れる。

俺「ん。ありがと。そー言えば、俺ってどの学校に所属してたんだ?」

アレイスター「長点上機中等部だ。」

俺「へー。俺ってエリート学校の生徒だったんだ。んじゃ、俺は忙しいから、もう行くわ。」

と言って外にテレポートする。

1人になってアレイスターが、

「この出会いが、彼をどれ位成長させるかが、見ものだ…」

と呟いていた。

〈第19学区の俺の家〉

俺「……という訳で俺は風紀委員になることになった。まあ、一生会えなくなるわけじゃないから、気にすんな。」

スキルアウトA「統括理事長の命令なら仕方ありませんね……。」

俺「じゃあ俺は家を作らなくちゃいけないから、もう行くわ。じゃーなー。」

〈第7学区のとある空き地〉

俺「この空き地か……。案外広いなー。つと、感傷に浸るのはここままでにして、家作ってしまうか。」

取り敢えずそれなりに硬い家を作りたいから、材料は未元物質ダイクマターしかないっしょー！

つつーことで、遠くにいる垣根帝督の能力をパクる。すると背中から純白の羽が伸びてくる。

俺「いつ使ってみてもメルヘンだな。この能力。」

そんなこと言いながらも未元物質内で最硬の物質を窓の無いビルの構造を参考に組み上げていく。

俺「やっと出来た…。」

今俺の目の前にあるのは、そこそこ高級そうな、二階建ての一軒家だが核爆弾が何発直撃しようが、びくともしない世界最強の要塞である。

しかし問題が1つある。それは、

俺「家具がない。」

そう家具がないのだ。いや、全くない訳ではなく、大量の高級家具を買ったのだが、買って直ぐに送られる筈もなく、今俺の手元には、そう手元には、家具がないのだ。(大事なことなので二回言った。)

結局、この日はホテルに泊まって翌日。取り敢えず登校初日から不良の烙印を押されるのは、嫌だったので髪の毛を黒に染めて、指輪とピアスを外す。ついでに、黒のカラコンも入れる。

そして家から必要なものを持って学校に向かう。

ちなみに俺の家は、学校から歩いて5分弱のところにある。

「学校にて」

高松清美「あなたのクラスの3・A組の担任をやってる高松清美よ。風紀委員との両立は大変だろうけど、頑張ってるね。」

そう俺に話しかけて来た、かなり美人な面倒見の良さそうなお姉さんって感じの人はどうやら俺の担任らしい。

そんな感じで、校内をぶらぶらしていると直ぐに時間がきて、今俺はクラスの教壇の上に立っている。

俺「風紀委員の都合で長点上機中等部からここに転校してきた神野秀也だ。ちなみにレベルは0だ。仲良くしてくれ。」

高松「はい、質問は休み時間にしてね。1限目の国語始めるわよ。」

（休み時間）

女子A「ねえ、好きな食べ物って何？」

女子B「神野くんって彼女いるの？」

女子C「長点上機ってあの長点上機だよね！どんなところなの！？」

女子D「神野くんは、どんな一芸に秀でているの？」

俺は今転校生への洗礼を受けている。俺は洗礼を

俺「寿司。いない。すごいとこ。腕つぶし。」

適当に受け流してた。すると、

男子A「お前ばっかり女子に囲まれて、羨まし過ぎるんだよ！このクラスの男子全員の気持ちを受け取りやがれ！！」

なんか、嫉妬されたようだ。

そんなもんを受け取るつもりならさらさら無い俺はクロスカウンターを決めようと構えていると、

？「転校生に何しようとしてるんですかー!!」

横から幼女（身長150cm未満で童顔小学生位）が横から飛んで来て、男子Aを殴り飛ばした。

？「大丈夫でしたかー？あつ、私の名前は、小条衣ですー。一応この学校の生徒会長をやっている、能力はレベル3の鉄拳制裁ジャスティスパンチといって、触れている鉄を固体と液体に自由に換えられて、それを操るという能力ですー。」

どうやら、この少女子供「小条衣ですー！」

……小条衣が助けてくれたようだ。

こんな感じで、今日の授業が過ぎていった。まあ、すっごい楽しかったな。俺は置き去り時代にこれでもかっつー位知識詰め込まれたし、完全記憶能力  
もある俺に死角は無い！

そして、俺はこれからお世話になる風紀委員第177支部に顔を出す。

俺「すみませんー。今日からこの支部に配属することになった神野秀也だー。」

どうやら少Z Y「小条ですー!」……なんか電波を受信したが、小条の口調が移ったようだ。

固法「あなたが神野くんね。私の名前は、固法美偉。ここの支部の支部長をしているわ。」

そこから、全員簡単な自己紹介をし、し終わったときに支部長が、

固法「ごめんなさいね。本当はここに非番の二人がいるのだけど。どこに行っちゃったのかしらね。非番でも今日は顔を出しなさいって言っておいたのに。」

俺「いいですよ。別に気にしてませんから。」

固法「そう?なら早速見回りに行ってもらうわ。といっても今日は道がわからないだろうから、私が道案内するけどね。」

俺「じゃあ、お願いします。」

（見回り中レストラン前）

固法「それで、あの公園を回って来た道に戻るっていうのが、見回りのルートよ。」

俺「成る程、ありがとうございます。」

固法「あつ、あれは白井さんと初春さんね。神野くん、さっき言ってた非番の二人がいるから、もう自己紹介をしてしましましょう。」

くレストラン内く

固法「それで？今日は必ず顔を出しなさいって言ったのだけれど、なんか言い訳はあるのかしら？」

怖ええー！！なんか心なしか支部長の背中から真っ黒なオーラが見える…。ぜってー、この人には勝てねえ。そんなことを思っている  
と、ツインテールの猛者<sup>へんたい</sup>が、

変態「そんなことよりも、お姉様とのデートの方が大切ですわ。」

御坂「アンタ風紀委員の仕事しなさいよ！！」

百合ワールドを全開し、それに御坂が突っ込んでいた。そんな中、  
比喻表現でなく頭がお花畑な女の子が

初春「ああー！すっかり忘れてましたー！本当にすみませーん。」

と謝り、お花畑の友達と思われる女の子が、

佐天「はっはー。ダメじゃーん、初春ー。風紀委員の仕事サボった  
らー。」

と笑っていた。

固法「まあ、いいわ。一応紹介しとくわね。この子が今日からこの  
支部に配属になった神<sup>n</sup>「直人お兄ちゃん！？」」

直人お兄ちゃん？俺のことをそう呼ぶのは、

俺「涙ちゃん？」

この子くらいだろう。

（佐天 side）

私たちが、御坂さんたちと会ってこれからどうするか考えていたとき、

固法「それで？今日は必ず顔を出しなさいって言うてのだけれど、なんか言い訳はあるのかしら？」

女性としての戦力がハンパじゃない歳上の女の人がかっちに素晴らしい笑みを浮かべながら、話しかけて来た。

白井「そんなことよりも、お姉様とのデートの方が大切ですわ。」

いや、白井さん！ここボケるとこじゃ無いから！

御坂「アンタ風紀委員の仕事しなさいよ！！」

御坂さんナイス突っ込みです！レベル5の名は伊達じゃ無いですね！何てことを思っていると、あたしの親友の初春が、

初春「ああー！すっかり忘れてましたー！本当にすみませーん。」

はっ！初春が怯えている！？ここはあたしがどうにかしなければ！！

佐天「はっはー。ダメじゃーん、初春ー。風紀委員の仕事サボったらー。」

取り敢えず雰囲気をよくしようと思ひみる。

固法「まあ、いいわ。」

つよつしやあ！乗りきったあ！！

固法「一応紹介しとくわね。この子が今日からこの支部に配属になった神n「直人お兄ちゃん!?」」

びつくりした。まさか、9年前にずっとお兄ちゃんと慕っていて、あたしが学園都市に行こうと思つたきつかけの人とほぼおんなじ人がここに居ただけだから。

〔佐天side end〕

いやー、びつくりだ。まさか、こんなところで昔の俺を知っている子がいるとは…。誰が予想出来たろうか?! いや、アレイस्ताーなら出来ただろうな、つてかあいつなら下手したらこれを仕組んだかもしれないし。

俺「訳あつて昔高田直人つて名乗つてた神野秀也だ。長点上機中等部から柵川中学校に転校してきた三年生だ。」

変態「わたくしはそこにいらつしやいます常盤台のエース御坂美琴お姉様のルームメイト兼露払いをやらせていただいており、将来を約束「してないわよ!」…ひどいですわ、お姉様…、取り敢えず白井黒子ですの。」

御坂「わたしは、この馬鹿の先輩の御坂美琴よ。」

初春「ええつと、私は佐天さんの親友で、白井さんの同僚の初春飾利です。よろしくお願いします。」

俺「ああ、よろしく。白子ちゃんとビリビリ」「誰がビリビリよ！わたしには御坂美琴っていう名前があんのよ！だからちゃんと名前前で呼びなさい！！」じゃあ美琴とお花畑ちゃんと泣ちゃん。」

うーん、みんな（泣ちゃん以外）俺の付けたあだ名に不満のようだ。まあ、これはスキルアウト時代から、「兄貴のネーミングセンスはありえねえ。」って言われてたから、諦めてるけど。

固法「なんか知り合いがいるみたいだし、神野くん、あなたはここで彼女らと親睦を深めてなさい。あとは、私達で何とかするから。」

俺「あつ、わかりました、支部長。」

御坂「それじゃあ、ゲーセン行こっか。」

そう言っつて俺は支部長と別れて、泣ちゃんたちと合流した。

（道中）  
ドンッ

突然立ち止まった美琴に、泣ちゃんが追突する。

佐天「ああつ、すみません、つて…」

白井「あら、お姉様は、クレープが食べたいのですか？それともお

まけのほうですか?」「ニヤリ

美琴の持っているチラシには、『先着100様に限定ゲコ太ストラップをプレゼント!』と書いてある。

御坂「何言ってるのよ!カエルよ!両生類よ!そんなんが可愛いワケ無いじゃない!」

俺「そうか?可愛くないか、これ?」

御坂「っそそそ、そんなこと無いわよ!でっでもアンタがどうしても欲しいっていうなら、べ、別に行ってやらないこともないわよ!」

俺「よし、じゃあクレープ食べにいくか!」

〈クレープの屋台前〉

今俺たちは

一屋台

.....

俺

淚ちゃん

美琴

の順番で並んでいて、盛んに淚ちゃんが前の子供たちがストラップを貰ったびに羨ましそうな目で見つめる美琴に、

佐天「良かったら、順番代わりますか？」

と聞いているが、美琴は

御坂「べつ、別にあんなカエル欲しくないからいいわよ！」

と強がっている。しかし目は口ほどに物を言う。という諺があるように、物凄く不安そうな表情をしている。

店員「それでは、キウイとイチゴとバナナのトッピングのクレープを二つとこれが最後のゲコ太ストラップになります。」

その瞬間美琴がテストでオール赤点をとったかのように絶望して、orz状態になっていた。

うーん、俺もこのストラップは気に入っているが、美琴ほど懸けてないしここはあげるべきか…。

俺「美琴、このストラップ欲しい？」

そう聞いた瞬間、

御坂「ありがとぉー！」

と行って俺から奪い取った。って速すぎだろ！聖人の俺でも見えなかったぞ、いま！

などと、色々あったが皆席について、クレープを食べていると、お花畑ちゃんが

初春「そう言えば、なんであの銀行は昼間から閉まっているのでしょうか？」

と言った。俺も一絶対悪夢（ジ・アブソリュート）で確認すると、中で銀行強盗が、一生懸命仕事をしていた。そして、

ドカァン！！

シャッターを爆破した。

白井「初春は警備員アンチスキルに連絡！「黒子！」…お姉様は一般人、ですから、ここで佐天さんと待機してくださいまし。」

俺「俺は行くわ。」

白井「お願いしますですよ。」

そう言っつて俺と銀行強盗の前にテレポートする。

白井「風紀委員ですの！貴方達を器物破損の容疑で拘束いたしますの！」

俺「白子ちゃんは、スラムザコを頼む、俺はキングスラムを殺る。」

白井「殺しちゃだめですよ。」

俺「わかってる。」

スラムA「余所見してんじゃねえぞ！」

と銀行強盗の1人が白子ちゃんに襲い掛かるが、

白井「そういう三下のセリフは、死亡フラグですよ。」

簡単に押し伏せる。そして俺は火の玉を出して、白子ちゃんを焼こうとするキングスラムを火の玉を飛ばす前にアッパーカットで沈める。

白井「こっちは終わりましたですよ。」

と言って気絶している三人に手錠をする白子ちゃん。

俺「いやいや、全然だろ。銀行強盗は5人組だったから「ダメえー！」「」

と、突然泣ちゃんの叫び声が聞こえる。そっちに目を向けると男の子守ろうとしている泣ちゃんが銀行強盗の1人に蹴られそうになっていた。しかも顔面。

俺は全力で走って銀行強盗と泣ちゃんの間に入り、銀行強盗の足を掴む。そしてそれを捻って強盗を倒し、溝尾を踏みつけて気絶させる。そして俺が最後の1人を探していると、

ブロロロオオン！！

と車が猛スピードで迫ってくる。

御坂「黒子お！悪いけどこれはわたしのケンカでもあるから、手え出させて貰うわよ！！」

そこに制服をクレープで汚した美琴がいた。

そこで突然キングスラ ムが悟った様な表情になり、

キングスラ ム「聞いたことがあるぞ！確か第七学区には捕まった  
ら最期、身も心も潰踏みにじる最悪の空間移動テレポーターがいて、！」

白井「誰のことですか、それ？」

白子ちゃん、怖いから「刺しますわよ？」的な目でダーツ持ちながら人を見るな。

キングスラ ム「そしてその空間移動を虜にする、最強の電撃エレクトロマスター使いがいて、……！」

つて美琴、超電磁砲レールガンを車にぶっ飛ばすつもりか！？

俺は車と美琴の間に入り超電磁砲が飛んでくるであろう地点と、車がおれに突っ込んでくるであろう地点のベクトルを調整し、美琴が超電磁砲を飛ばした、瞬間に右手を降り下ろす。

すると俺が超電磁砲を叩き落とした様な軌道を描いて地面に直撃し、俺にぶつかりそうになった車は運転手の安全を確保して大破した。

（その後）

取り敢えず銀行強盗たちは警備員にれんこうされ、俺は美琴にお前の能力は危険だから人に向かって使うなと説教を今は涙ちゃんが助けた男の子が泣ちゃんにお礼を言っているところだ。

男の子「おねーちゃんありがとー！」

佐天「あたしなんてなにもしてないよ、結局直人お兄ちゃんが全部解決しちゃっ「そんなこと無いよ。」え？」

俺「だって泣ちゃんが男の子を守ったことは事実だろ？だったらそれを誇れることだし、誰にも文句は言わせないよ。」

御坂「そんなことよりも、アンタ！どうやってわたしの超電磁砲をとめたのよ！？」

美琴がなんか全身を震わせて聞いてくる。

俺「気合い、鍛えたら誰だってできる。」

…どうやら俺は地雷を踏んだようだ。AIM拡散力場の影響で電撃使いには、絶対悪夢は効かないはずなのに美琴の感情が読める。そして多分次の一言は、

御坂「アンタ、わたしと勝負しなさい！」

…予想通りだ。

## 第6話 (超電磁砲の) 原作介入(後書き)

オリキャラの設定

高松清美(女、28才)

身長が182と高く、すらっとしているのに出るべきところを出ていない。

かなりの美人で、面倒見の良さそうな雰囲気的女性。

上条当麻のどストライクな人。

小条衣(女、14)

身長は138(本人は140と言いつけている)でかなりの童顔。  
学校内の幼女崇拜者からの熱狂的な支援を受け、生徒会長に。語尾に「〜」。とつける。能力は鉄拳制裁ジャスティスパンチといって、触れている鉄を固体、液体に自由に变化させ、操れる。それによってきぬはたのオフエンスアーマー窒素甲装のように、怪力になる。

固法美偉が風紀委員第177支部の支部長。

御坂「遂にわたしの超電磁砲を素手で叩き落としたアイツとの勝負  
!!!」

ゆっぴー、神野「第7話聖人对超能力者」

**第7話 聖人对超能力者（前書き）**

遂に御坂対神野です！

やっぱりこれは、やりたいですよね！

しかし戦闘シーンがかなり短めです。

## 第7話 聖人对超能力者

御坂「アンタわたしと勝負しなさい！」

今俺は目の前にいる美琴の必殺技である超電磁砲レベルガンを素手で叩き落とした（ように見えた）ことが美琴にとってはご不満だったらしく、勝負を申し込まれている。

俺「いやだよ。俺、レベル0。お前、レベル5。これじゃあ勝負にならない。お分かり？」

こんなところで自分のレベル0のレベルを剥がす訳にはいかない！

御坂「でもアンタわたしの超電磁砲を素手で叩き落としたじゃない。あんなのふつうの人間に出来るわけ無いじゃない！！！」

それを言われると苦しいな。

まあ、一回くらいなら、勝負してもいいか。能力使わないけど。

俺「はあ、仕方ないな。んで、どうやってたら勝負は終わるんだ？」

御坂「そんなのわたしが勝ったらに決まってるじゃない！」

…どうやら一回では終わらなそうだ。

俺「一回だけならいいぞ。ただしルールはどちらかがギブアップか、戦闘不能になるまでな。まさかお前はどちらかが、死ぬまでとか言うクレイジールールで殺りたくないだろ？」

御坂「ちっ、仕方ないわね。そのルールでいいわよ。」

今舌打ちしたよな？

本当はどちらかが、死ぬまで（クレイジールールで）殺りたかったのか…？

）とある河原）

黒子「それでは、このコインが落ちたら始めですの。」

と言つて、コインを思い切り上に弾く。

あと2メートル

あと1メートル

―俺は身構える。

あと50センチ

―俺は頭を戦闘モードに切り替える。

あと10センチ

―まだだ。

そしてコインが地面に着いた瞬間、俺は美琴に向かってダッシュし、美琴は俺に向かって電撃を繰り出す。

俺は電撃が飛ばされた瞬間に右側に避け、美琴の横腹に蹴りを入れようとする。

しかし美琴は蹴りが当たる瞬間、すんでのところで直撃を回避する。

美琴が戦法を変えて、今度は砂鉄を操り、俺の周りを砂鉄で囲む。

それを俺は右手で強引に抉じ開け、目の前の美琴を殴るモーションに入る。

美琴は砂鉄の盾を作ったが、今度は左手でそれを破り、美琴の頭を掴んで地面に叩きつける。

そこで美琴は意識を失い、砂鉄は重力に逆らうことなく地面に落ちていった。

初春「あのレベル5の御坂さんに勝つなんて、神野先輩は凄いですね！」

俺「いやいや、美琴が手を抜いてくれたから勝てたんであって、本気で来られてたら俺死んでたから。それに思いつきり血を流して相手がびびった隙を突いたっていう感じだしな。」

と言って自分の血で肘から下が真っ赤に染まった両手を掲げる。

御坂「まさかあんな戦い方をするとは思わなかったわ（呆）。」

俺「まあ、死ななければ戦える、ぐらいの気持ちだったからね。じゃあ俺は病院に行くわ。白子ちゃん、送って。」

白井「仕方がないですの。」

と言って俺を病院まで送ってくれた。

〔病院〕

ヘブンキャンセラー

冥土帰し「どうやったらこんな怪我の仕方をするんだいね？傷口に砂鉄が入ってて下手したら切断しなくちゃいけなかつたんだよ？まあ僕が見るからには、ちゃんと元通りに治すんだけどね？」

俺「すみません、色々あつたんです。」

## 第7話 聖人对超能力者（後書き）

感想評価誤字脱字の指摘どんどん下さい！

御坂「神野との勝負には負けたけど、次のアイツとの勝負には勝つわ！！そして風紀委員ばかりが狙われる謎の連続空虚爆破事件、その事件解決のために神野が動く！」

ゆっぴー、神野「次回、第八話不幸と爆弾」

**第8話 不幸と爆弾（前書き）**

今回は書き方変えました

あと少しグロ注意です。

## 第8話 不幸と爆弾

7月17日俺は朝7時15分ごろに風紀委員ジャッジメント177支部に顔を出す  
と、もうほとんどの人が来ていた。

「あれ？風紀委員って、8時半までに集合ですよね？」

「ええそうよ。でも今は空虚爆破事件グランドブレイクのせいで、書類が溜まって  
いるから、皆早く来ているのよ。」

と支部長が答える。

そう言えば皆書類整理ばかりしてますね…。

「そうですね。いくら非番と言えど、こんな大変な時期に風紀委員  
に来ないなんて、初春は何を考えてをりますの!？」

そう支部長の隣で喚く白子ちゃん。

「いや、非番の日は休んで良いだろ。」

そう俺が突っ込みを入れると、

「いえいえ、わたくしも今日は本来なら非番のはずなのですが、  
溜まっている書類を片付けるためにわざわざ、ここに今日も来てい  
るんですの。」

と言い返してきた。

でもさつき確認したけどお前の書類って全部始末書じふんのせいだったよな？

…これを言ったらかわいそうだったから言わなかったけど。

「じゃあ神野くん、取り敢えず自分の席に言って書類を書いてくれるかしら？」

そう言っつて悪魔あくまが指差す先には書類がこれでもか！と言っつくらい山盛りになっている机と何故か一先客（書類の山）が座っている椅子がある。

「えーと、流石に多すぎませんか？」

と素直に疑問を口にすると、

「誰かさんが校外で活動して、道路壊すはあげくのはてにその誰かさんはレベル5と戦闘をして、河原をめちゃくちゃにするはで、すみませんでした。今すぐ書類を片付けます。」

なんか物凄い恐怖を感じたから、素直に謝った。

この人実は相手に恐怖を与える能力者か！？と思っつたが、そんなこととは無くレベル3クリアポイントの透視能力透視能力だった。

書類多すぎんだろ！もう二時間かけて書類200枚位書いてるけど、全然書類の山減へってねーし！

そんな感じで集中が切れてきた頃に支部長が、

「神野くん、白井さん、そろそろ気分転換に見回りでも行かない？」と誘われたので、

「勿論行きます（ですの）！！」

勿論了承した。

やはり休日であるということ、ここが第7学区である、ということとがあつてかなり外には人がいる。そして今は7月である。つまり何が言いたいのかと言うと、

「暑いのです。」

今かなり暑いらしい。

暑いらしいと言うのは、俺は能力で必要以上の熱量を反射していて全く暑くないからである。

しかし能力者であることは隠しているので、

「神野くん、よく平気でいられるはね。」

と言われると

「まあ、暑いのは慣れてますから。」

と嘘をつく。

そんなことを言っていると、白子ちゃんが、

「初春を見つけたのです！ですからわたくしは初春に書類を書かせ！ゲフンゲフン、協力してもらいますので支部に戻りますの。」

と言って、目の前のレストランにテレポートする。

残されたおれたちは、

「どうしますか、支部長？」

「取り敢えず、なかに入りましょう。」

なかに入ることになった。

（レストラン内）

レストランの中は暑さから逃げてきた人たちで、かなり賑わっていた。

そのなかの席の1つに美琴が座っていた。

それを見て支部長は、

「あなた風紀委員の研修ね。「えっ？」だってほら、そこに腕章があるじゃない。」

そう言って、（多分）お花畑ちゃんの腕章を指差す。

それを俺が指摘しようとする、美琴が物凄い勢いでにらんできた。

「はい、そうです！今日からここで研修することになった御坂美琴です。よろしくお願いします！」

えっ、美琴は風紀委員やりたかったの？

じゃあ俺じゃなくて美琴にやらせれば良かったじゃん、風紀委員。

でも、美琴は風紀委員活動ふりようがりを前々からやってそうな描写あったっけ、アニメ第1話で。

レベル5が動いててもダメってどんだけ治安悪いの、第7学区…。

そんなこと思っていると、支部長が

「じゃあ、私は支部に戻るから、ここにいる神野くんの言うことをちゃんと聞いてね。」

…は？

今満面の笑みで、聞き捨てならないことを言いましたよ、この人！？

「いやいや、風紀委員になって二日目の人間に研修生の面倒見さすってどんな神経してるんですか、支部長！？」

「まあまあ、そんなこと言わないでよろしくお願いするわ。その代わりと言ってはなんだけど、あなたの書類を少し片付けておくから。」

「…しかたありませんね。」

このままいつでも平行線を行くだけと思い、俺は妥協する。

するこ

「それではよろしくお願いします！神野先輩！！」

美琴にめっちゃ頭を下げられた。

結果から言うと、全然良くなかった。

1、コンビニ前でごみ掃除。

ポイ捨てした不良に放電。（軽くだったので直ぐに回復、不良は逃走した。）

2、迷っている人に道を聞かれる

まず、地図が読めない。（俺がその人を連れて行った。）

3、街中を巡回

カップルを不良のナンパと勘違いし引き離す。（後にすぐくっついた。）

4、飛行機のラジコンの操作が不能になった少年を発見。

操作しようとしてラジコンに雷撃をくらわせ、墜落させる。（ラジコンは壊れた。）

そんな感じでダメダメだった（大事なことなので二回言った。）美

琴は今公園で絶賛落ち込み中である。

「はあく、私って風紀委員に向いていないのかなあ…?」  
き、気まずい…!

美琴の仕事内容はどう頑張ってもフォローできるもので無いし、か  
とって「うん、俺もそう思う。」何て言ったら、余計落ち込むっ  
て決まってるし。

そんなことを考えていると、お花畑ちゃんからメールがきた。

From お花畑ちゃん

Sub 落とし物の搜索願いです!

本文五歳位の女の子がバックを無くしたそうです。特徴は赤くてお  
花のワッペンがついていることです。×公園で無くしたそうです。  
あと固法先輩が「見つかるまで帰って来ないで。」って言っていま  
した。

「おい、美琴。赤くてお花のワッペンがついているバックの落とし  
物があったそうだ。これを見つけないきゃ帰れないから。」  
すると美琴が慌てた様子で

「もしかしてそれって、子供用のカバンなの?」

聞いてきた。

「多分そうだろ。ってか、大人がそのバツク持ってたら、なんか嫌だ。」

と俺が答えると、

「こんなところで、話してる場合じゃ無いわよ！早くしないと！」

と言って俺を引っ張って行くこととする。

「おいおい、ちょっと待て。その（多分）子供がバツクを無くしたところがここらしいから。わざわざどこかに探しに行く必要無いから。「ええっ、じゃあ爆発物処理班とか呼ばなくても良いの！？いや、そんなこと言うてる前に、まず回収しなくちゃ！」「」

と言って美琴は自己完結して、走って行ってしまった。

ってか、今爆発物処理班とか言わなかったか？

今のバツクにはひったくり対策で自爆機能でもついているのだろうか。

（10分後）

美琴がそこで遊んでいた子供たちに「ノーパン中学生」と呼ばれている間俺がなんとか犬がそのバツクをくわえているのを発見した。

「美琴！お前の右側にバツクをくわえている犬がいる！捕まえる！」

と俺が叫ぶと、

「まてや、コルアアア!!!」

と叫びながら犬に向かって猛ダッシュを仕掛ける。

犬は当然逃げるし、人間が追いつける訳も無いので、美琴は電灯に向かつて電撃を繰り返す。そして犬がびっくりして止まっているうちに確保する。

あの電灯の始末書はあいつに書かせよう。俺の監督責任を問われようが絶対にあいつに書かす。

そんなことを思っているとバックが飛んで行って、噴水に向かって落下しようとする。

「美琴、上だ!!!噴水に落ちようとしている!!!」

と俺が叫ぶと、

「間に合ええええ!!!」

美琴が自分の生体電気を操作して、かなりの速さで噴水に突っ込む。流石レベル5。

そうすると当然、

ザッバアアン!!!

美琴は噴水に落ちる。しかしバックは守ったようで、その顔はどこ

か誇らしそつだ。

その後、バックを落とした子にバックを返して、一件落着となった。

くその日の夕方、とあるコンビニにてく

三人称視点

とあるコンビニに突然風紀委員が駆けつけてきた。

「風紀委員です！ここで重力子の変化が観測されました！」

当然店員は風紀委員が駆けつけて来たことと、聞き馴染みの無い言葉を言われて混乱する。

「えっ、じゅ、重力子…？」

「つまりここに爆弾が仕掛けられました！」

爆弾。

誰でも聞いたことのある、危険物の名を口にされ、店員は初めてこの重大さを悟る。

しかしそっからの店員の誘導は素晴らしかった。

故にこの後起こることに關してこの店員は悪く無いだろう。

店員が客を誘導する中一人の少女が転んで足を挫いてしまう。

「大丈夫ですか!？」

と男の風紀委員が呼び掛けたその時、

グリユン!と近くにあった人形の五体が人形の中心に巻き込まれる。

その風紀委員は「これが爆弾だ。」と直感し、咄嗟に少女を庇う姿勢になる。

その直後に、

ドゴオオオン!!

店内をほとんど破壊するような爆発が起こる。

「大丈夫ですか!？」

爆発が収まり、店内に取り残された人の安否を確認する風紀委員の固法美偉。

それに一般人の少女が答える。

「私はこの人が庇ってくださったから大丈夫だったんですが…。」

しかし、少女を庇った風紀委員は背中に重度の火傷を負い、さらに色々な破片が刺さってて全然大丈夫では無かった。

〜同時刻、違うコンビニにて〜

俺は暇潰しにコンビニに立ち寄っていると、

「ああ、ATMにカードを飲み込まれるなんて、不幸だ！」

我らの主人公かみじょう歩く不幸しゆんがいた。

そのまま、歩く不幸を観察していると、美琴バトルマニアが現れて、

「見つけたわよ！アンタ、わたしと勝負しなさい！」

勝負を仕掛けていた。

そんな、美琴に対して上条先輩は、

「はあー、上条さんは今ATMにカードを飲み込まれて、それどころでは無いのですよ…。」

と自分の不幸を告白する。

すると美琴が

「そんなん、こうすれば良いじゃない。」

といい、—ATMに電撃を食らわせ（はんざいこういをおこない）、カードを取り出す。上条先輩は、

「おおー、ありがとうございます。御坂美琴様〜。」

何て言っているが、あんなことをしたら、

『ピーー、敵性の電撃を確認。直ちに警備員アンチスキルに通報します。』

こうなるだろう。

「不幸だあー！」

こう言い残して、上条先輩は美琴を連れて走り去る。  
一応あいつらを追うか。

そう思い、俺もコンビニから走り去る。

とある公園にて

「アンタ、わたしと勝負しなさい！」

人気の無い公園で美琴が叫ぶ。

「いやいや、上条さんはただのレベル0ですよ！？レベル5のビリビリに勝てる訳ない…ってうおっ！」

美琴が上条先輩が話してる途中に電撃を放つが、それを上条先輩は右手で簡単に打ち消す。

「はいそこまでだー、ATM襲撃犯ども。風紀委員だ、さっさと降伏しやがれー。」

そう言つて、俺は姿を現す。

すると上条先輩が何やら慌てた様子で

「えーつとですね、風紀委員の方これはそのビリビリ中学生が勝手にやったことであつてですね…冗談だ。」「…へ？」

俺が冗談だと言つと、上条先輩がアホ丸出しな顔をする。

「俺は別にお前らを捕まえる気は無いから、さっさと帰ってくれ。」

「ちよつと待ったあ！わたしはアイツと勝負がしたいの、だから邪魔しな」黙れ。警備員に通報されなくなったらさっさと帰れ。」

そう言つと、流石にさっきのはやり過ぎたと思つてたのが、あつさりと帰つてくれた。

「さっきはありがとな、お蔭でビリビリ中学生に追っかけられなくてすんだよ。えーつと…」

「神野秀也です。」

と一応自己紹介しておく。

「おう、ありがとな、秀也。俺は上条当麻だ、よろしくな。あと俺に敬語とか使わなくていいから。」

「わかつた、当麻。気を付けてかえれよ。」

当麻、めっちゃ良い人だあー！

そんなことを思いながら俺たちは別れた。

〈第177支部〉

「明らかにおかしいだろ、これ。」

いや、別に帰つて来たら支部の皆が遊んでいたという訳ではない。むしろ頑張りすぎたのか屍になっているのが見える。

問題はそこじゃない、

「なんで書類減ってないの？」

そつ。書類が減ってないことだ。

依然俺の机の上には大量の書類の山が乗っていて、俺の椅子には先客（大量の書類）がいる状態だ。

「ありがとうございます。あとは俺がやるんで帰っていいですよ。」  
と言って皆に帰ってもらつ。

（7月18日午前6時）

気がついたら6時になっていた。  
すると、支部長が

「忘れ物をしたから取りにきたけど、あなたまだ書類整理してたの？」

と聞いてきた。

「ああ…、はい…。お蔭であと100枚位ですよ…。」

確かに武装無能力者集団時代に5夜連続徹夜はしたことがあるが、流石にぶつ<sup>スキルアウト</sup>続けて書類整理はきつい。

「あなた今日は非番だから休んで良いわよ、って言うか休みなさい。」

そんな俺の状態を気にしたのか、支部長は俺に休むように言ってく

れた。

「はい…分かりました…。」

勿論休むことにする。

そこからラストスパートをかけ、なんとか8時に全ての書類を片付け、家でシャワーを浴び髪を染め直して学校に行く。

～放課後～

俺は授業を受け流して帰ろうとしていると、涙ちゃんとお花畑ちゃんに偶然あった。

「あつ、直七…秀也お兄ちゃん！今からセブンスミストって言う洋服屋さんに行くんだけどいっしょに行かない？」

今の俺は神野秀也なのでできれば秀也と呼んでくれ、言うてある。そんなことより、別に眠いということ以外に断る理由が無いので、

「別にいいよ。」

と了承する。

～セブンスミスト～

ここセブンスミストは第7学区で最大のデパートである。つまり平日とは言えかなり人が来ている。

まあ、何が言いたいのかと言うと、

「（めっちゃ周囲の視線が痛え。）」

そう、周囲の視線が痛いのだ。

簡単に今の俺の状態を説明すると、女の子三人（しかもかなりレベルの高い）に囲まれて談笑しながらデパートに来ている。

まあ、嫉妬しない方がおかしい状況なのである。

あと、言い忘れていたが途中で美琴が合流して、女の子三人である。ちなみに、白子ちゃんは風紀委員の仕事があるらしく来れないことを盛大に悔やんでいたらしい。

まあ、お花畑ちゃんが見回りをしていると、称してここにきていると言っるのは気にしないでおう。

そんな感じでいま俺たちはパジャマコーナーにいて、美琴がファンシーなパジャマに向かっていたのに突然振り向いて

「ねえ、このパジャマ…」

「うわーこのパジャマ子供っばいですねー。」

とお花畑ちゃんが言い、

「そうだねー、小学生のときは、ニーユーの着てたけど中学生になつてこれはねえー。」

と涙ちゃんが追撃する。

しかし、

「そうか？可愛くないか、これ？」

俺だけ違う感性を持っていた。

なんでだろう…？

そんなことを考えているとお花畑ちゃんが

「あっち側に水着コーナーがありますよー。」

と暗に「行きたい」というので、

「じゃあ行くか。涙ちゃんたちはどうする？」

賛同の意を示して、他の人達の意見を募る。

「じゃあ、あたしは初春と一緒に行くわ。」

と涙ちゃんが言い、

「わたしはここでもう少しパジャマを探すわ」

と美琴が言う。

美琴はあれを買うつもりだろうか？

（10分後）

お花畑ちゃんに白子ちゃんからここで重力子の変化を観測したと連絡が入る。

ここは、最年長の俺がまとめるべきかな。

「じゃあ、お花畑ちゃんは店に知らせてから誘導に参加して。美琴と淚ちゃんはこっから避難して。あと、野次馬の中に多分怪しい犯人がいるから裏路地に入っていく怪しい人がいら連絡して。じゃあ、行動開始！」

そう言うつと皆散らばっていく。

なんだかんだ言つて俺はお花畑ちゃんに合流して皆の誘導を済まし、あとは自分たちだけだと思つていたら、昨日バックを無くした子がお花畑ちゃんに向かつて、

「メガネのおにーちゃんがこれをジャツジメントのおねーちゃんにつて」

と言つてカエルの人形を差し出す。

すると突然人形が集束し始める。

これが爆弾であると直感したお花畑ちゃんは人形を投げとばすもまだ危険な位置にある。

また、視界の端で美琴が超電磁砲レールガンのコインを落とすのを確認する。

ちっ、俺が能力を使うしかないか…

そう思い、爆弾に近づき右手で触ると

「おいっ！」

と怒鳴られて何者かに肩を捕まれる。

振り向いてみると、当麻が”右手”で俺の肩を掴んでいた。

っおい、アホ！手離せ！

なんて思っているうちに爆弾が爆発。

と同時に俺は当麻を蹴り飛ばす。

反射は戻ったが、右手がかなりやられた…。

そして爆発のベクトルを操作して、爆風と炎を明後日の方向に飛ばす。

爆風が収まった頃美琴が

「アンタ今何したの…？」

と聞いてくる。その問いに俺は

「爆発を投げ飛ばした。多分鍛えたら美琴にも出来ると思うよ。それに今回は全く無事じゃないし。」

と言って肘から下の無い右手を掲げる。

ちなみに今俺は能力で出血と痛みを無くしている。

呆然としている美琴を無視して俺は涙ちゃんに電話を掛ける

「あつもしもし、涙ちゃん？怪しい人見つかった？…うん…ありがとう、じゃあそっちに向かうわ。あと俺少し怪我したから確保は俺がするけど引き渡しはお花畑ちゃんにさせるから。あと白子ちゃんに俺を病院に運ぶように言つといて。」

と言って電話を切り、爆弾魔の元に向かう。

「やあ。」

と俺は爆弾魔の介旅初矢に声を掛ける。

「はあ、どちら様ですか？」

一瞬俺の腕章を見て表情が歪むがすぐに持ち直して聞く。  
ちなみに今俺は右手を隠しているから見えない。

「お前が起こした爆発、凄かったな。」無関係な一般人の”死人が  
一人と怪我人一人で済んだけどあれは、レベル4クラスだな。」

と言い右手を見せる。

しかしまだこいつはとぼけようとするので、

「えっ、僕には何のことだか」とぼけんな「っっ！」

と言いこいつを黙らせる。

「ほら、”お前のせいで”死んだお前が人形を渡した女の子が来て  
いるぞ。」

と言いきいつに幻覚を見せる。

『おにーちゃん、なんでわたしをころしたの？』

ちなみに今、明らかに学園都市では突っ込みどころ満載な状況だが、  
俺の一絶対悪夢（ジ・アブソリュート）は「疑う」という思考すら

相手に持たせないという能力でこいつは完全にこの幻覚を本物と認識している。

という訳でいまこいつには全身に火傷を負って血を流している女の子が見えている。

「つつ、ちつ、違う！俺は悪く無い！俺は俺を助けない無能な風紀委員を殺るために行動を起こしたんだ！！」

おつ、言ってることが滅茶苦茶になってきた  
これはあと一押しだな

「ふーん、そんなことこの子の親に言えんの？『お宅の娘さんは無能な風紀委員を殺すために犠牲になってもらいました。必要な犠牲だったので僕は悪くありません。』って。ふざけんなよ。」

『おにーちゃん、わたし、すごくあつかったんだよ？』

「俺は…、俺は…、うわー！！」

あつ、完全に壊れたなこいつ。

まあ、絶対悪夢で強制的に直すけど。

そして、こいつを直した後で

「わりい、今までの、全部冗談。」

そう言って女の子の幻覚を消す。

「……………は？冗談？」

と言って呆然とする介旅。

「うん、冗談。俺の怪我は本物だけど他には死人どころか怪我人すら一人も出てないよ。でも本当にこうなりそうだったからもうすんなよ？こんなこと。あとお前にカツアゲしてた連中は補導しとくから、安心しろ。後でここにお前が狙った風紀委員が来るから言うこと聞けよー。」

と言ってテレポートした白子ちゃんに掴まって病院にテレポートしてもらった。

（病院にて）

「君はどうしてすぐに大怪我してここにくるんだね？もしかしてナース好き？」

とカエル顔の医者が（割りと本気で）冗談を言ってくるので、

「どちらかと言うと妹好きです。いませんけど。」

と（割りと本気で）冗談で答える。

「ふーん、まあ、義手は明日の朝までには作っておくから今日は入院していくんだね？」

「はい、分かりました。」

こうして俺の長い一日が終わった。  
ちなみにこの日は11時間寝た。



**第9話 武装無能力者集団と魔術師（前書き）**

今回の神野はSです。かなりの戦闘狂っぷりを発揮します。

それでは第9話をどうぞ！

## 第9話 武装無能力者集団と魔術師

俺は朝先生から義手を貰って学校へ向かう。

先生に言ったら普通に許可が降りた。

ちなみにこの義手は恐ろしい位の高性能で、動かしたいと願ったように動くのは当たすり前で、精密機械のくせにどれだけ水に着けても壊れない。

さらに俺が本気で物を殴っても傷1つ付かない、と言うものらしい。

そして学校。

ここは特に言うべきことも無く終わって言った。

決して俺がぼつちな訳で無い。

むしろクラス内で友人は多いほうである。

そして風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の支部により、白子ちゃんを見回りに行く。

……何故か美琴も付いてきたが。

途中涙ちゃんと合流して皆でかき氷を食べることに。

ちなみに俺はブルーハワイ、涙ちゃんはレモン、美琴と白子ちゃんはいちごである。

お花畑ちゃんは風邪で休みらしい。

そして風鈴の音を聞くと涼しく感じることを共感覚醒と言うことと知ったり、同じ味を注文してしまっただがために美琴と間接キスが出

来なかった白子ちゃんが自傷行為に走ったりと、色々あったがなんだかんだ言ってお花畑ちゃんのお見舞いに行くことになった。

「お花畑ちゃん宅」

「悪いな、こんな大勢で突然押し掛けて。しかも男もいるし。」

「あつ初春。これ宿題ねー。」

「あつ、ありがとうございます佐天さん。あと謝るのはこっちですよ神野先輩。本当は私がもてなさなくちゃいけないのに……」

と謝って立とうとするが、

「ダメだよ初春。病人は寝てないと。」

と涙ちゃんに阻まれる。

「そんなことよりも書庫と実際のレベルが違うことについてですの。」

白子ちゃんがと言って話題を変える。

白子ちゃん、流石にそんなことよりもは酷いと思うぞ。

「やっぱり幻想御手じゃね？音楽ファイルって言う噂もあるな。まあ、実際見たわけじゃ無いから分かんないけど。」

と俺が介旅の頭を覗いて仕入れた情報を披露するが、

「それでも、やはり現物が無いとどうも言えませんのです。」

と切り捨てられる。

まあ、そうだろうな。

こんな根拠のない情報を信用しているようじゃ風紀委員失格だろう。なんて思っていると、

「それなら、こんな掲示板がありますよー。」

と初春がコンピューターの画面をこっちに向ける。

それを見て俺は

「ネットに実名出すとかどんだけ初心者だよ……」

と呟く。

そう、こいつらは掲示板に実名を出しているのだ。こいつら、頭大丈夫か？

「では、やはりここは潜入捜査しかないのです。」

と言う白子ちゃんに対して俺は、

「いや、俺が（肉体言語で）お話しするわ。絶対成功させるから問題ないぞ。」

と自信満々に言う。

「とあるレストラン」  
俺はピアスと指輪をはめ、真っ黒のパーカーをきてフードを目一杯被っている。

ちなみに白子ちゃんとかには来るなと言っている。

秀囲気で俺のしようとしていることを悟ったのか、あっさり引き下がってくれた。

そして俺の目の前にはネットに自分の実名を出すバカどもが五人ほどいる。

「おい、幻想御手についての情報を集めているんだが？というか痛い目に会いたく無かったら、知っていること全部話せ。」

と言うとトイレから9人ほどゾロゾロと出てくる。

「良くこの人数を相手にしようと思ったな！」

と不良の一人が言う。

「別にこの程度ならまだ問題無い。あと店員さん、アシテスキル警備員に通報しなくていいですよー^^。」

一応言っておくが、能力を使いつもりは、全くない。  
聖人の身体能力だけで大概のことは、どうにかなる。

「調子乗りやがって…！」

と言って俺を連れていく。

くとある発電所前)

「ここでいいか。」

俺がそう呟いた瞬間に、近くにいた男の溝尾をコークスクリューでぶん殴り、体がくの字になった瞬間に顔面に膝蹴りを加える。

さらにその隣にいた男が動く前にアッパーカットを決め、さらに近くにいた男の腕を掴み受身の取れないタイミングで、背負い投げをし、頭をコンクリートに激突させる。

そんな感じで、ある者は両腕の関節をはずされ、両膝に重い一撃を食らったりして、戦闘不能にしていき、残ったのはあと一人になった。

「ひいつ、がっ」

俺は四つん這いになって逃げようとする最後の一人の腰を踏みつけて動けないようにする。

「幻想御手について知っていることを全部吐け、嫌だついたら、お前の肩を粉碎骨折させるから。」

と言って不良の肩に足を乗せ体重を掛けていく。

そして携帯の録音機能を起動させる。

「わ、わかった。話すから肩を砕かなくてくれ！げ、幻想御手は曲なんだ！ここに本物がある！誰が何の目的で作ったか何て知らねえ

！だから肩を砕かないでくれ！！」

一俺の能力（ジ・アブソリュート）で分かっているので足を退ける。

この能力を使えば録音も捏造出来たが最近（アレイスターと書類のせいで）ストレスが溜まったので、武装無能力者集団にはその発散に協力してもらったのだ。

本人たちにはいい迷惑だろうが。

何はともあれその録音データを白子ちゃんに送って俺は眠ることにした。

（7月20日）

言わずと知れた原作初日だ。

しかし俺にはまだ10万3000冊の魔導書の知識が無い。

ふざけんなよ糞神が。

原作介入前には与えるつつてただろうが。

そんなことを思いながら、上条宅（ハッキングで調べた。ちなみにセブンスミストの件で絶対悪夢が当麻に通じないことが分かっている。）に向かうと、

「ぎゃああああー！」

という悲鳴が聞こえてくる。

そこで俺は急いで当麻の部屋の戸を蹴破り、

「風紀委員だ。何があった。」

と入り込む。

そして目の前には予想通り、全裸のインデックスが当麻に噛みついていてるところだった。

「この状況は服を脱がされて襲われている少女が必死に抵抗しているようにしか見えないが、なんか弁明する？当麻？場合によっては警備員に通報するけど。」

俺が満面の（目以外）笑みを浮かべて聞く。

「いやいや、違うんですよ！？秀也さん！！これには山より深くて海より高い訳が…って冗談言ったことについては謝るから警備員にだけは通報しないでー！」

と割りとしリアスを演じてたのにギャグで片付けられそうだったの  
で腹いせに本気で通報しようとしたら、全力で止められてしまった。

「冗談だ。でも本当に何があった？」

ここらへんで打ち切らないと永遠に続きそうだったから打ち切る。

話しによると原作通り、寮の屋上をインデックスが走って逃げていると背後から何者かの攻撃を食らい当麻のベランダに落ちてしまっ  
たらしい。

「で、その何者かっていうのは魔術師なんだろう？そのインデックス  
っていう子、魔術サイドでは結構有名だし。」

と俺は無理矢理魔術サイドと接点を作ろうとする。

当麻とインデックスが警戒心を剥き出しにして、

「なんで秀也（やうしや）が魔術のことを知っているだ？（のか教えてほしいかも。）」

と聞いてきた。

「おいおい、俺をそんな親の仇みたいな目で見るな。俺は色々事情があつて魔術について少しだけ知っているただの中学生から。」

と言つと白子ちゃんから電話がかかってくる。

「もしもし、白子ちゃん。どうした？」

と聞くと白子ちゃんが鬼気迫る様子で

『神野先輩！大変ですの！空虚爆破事件（ケラフビトン）の介旅初矢が突然意識不明になりましたですの！取り敢えず、第7学区の × 病院に来てほしいですの！』

と言つて電話を切る。

俺は当麻たちに向き直つて

「悪いけど、風紀委員の仕事が入ったから俺はもう行くわ。インデックス、困つたら何時でも頼りに来ていいぞ。」

と言って俺の住所の書かれた紙を渡す。  
そして、

「あと、当麻。インデックスを襲うんならちゃんと避妊しろよ。」  
と言って病院に向かう。

まあ、部屋から出るときにインデックスの顔が真っ赤になってたり、  
当麻が「ちつがあああう！！」と叫んでいたのは無視した。

くとある病院

俺が病院に着いたとき、白子ちゃんと何故かいる美琴がなにやら白衣を着た博士っぽい人と自己紹介をしようとしているところだった。

「悪い、白子ちゃん遅くなった。」

と俺が謝ると

「遅い！」

これまた何故か美琴に怒られた。

「いや、待て。その前に何でお前がここにいるんだ？」

と素朴な疑問を口に出すと、

「そんなの暇潰しに決まってるじゃない。」

と返された。

いやいや、ちょっと待て。

そんな暇潰し感覚で一般人が風紀委員の活動に参加していいのか？」

「お姉様は特別です。」

白子ちゃん、テレバシー念導会話だっけ？テレポーター空間移動だったと思うんだけど…。」

「口に出ていますの。」

ああ、成る程。

しかしこんなことをしていても話は進まないの、白子ちゃんが、

「わたくしたちは風紀委員の白井黒子と神野秀也と常盤台中学の御坂美琴と申しますの。」

と自己紹介をする。

「君が第3位と第3ろ「その呼び方は止めてもらえますか？」わかつた、気分を害したのなら謝ろう。」

と危つく俺の順位がばれそうだったので、止める。

「いえ、そこまでではありませんから。」

ちなみに今この人の頭を覗いて、ちょっと黒い研究者は俺のことをレベル5第6位と知っているらしい。

あと、この人が幻想御手の犯人であることと、その動機をみた。

……今回はやむを得なくなるまで手を出さないでおこう。

そんなことを思っていると、木山先生が

「私は見ての通り研究者をしている木山春美だ。専門はA I M拡散力場だ。それにしてもここは暑いな…。」

と言つて自己紹介& a m p ; ストリップを開始する。

その瞬間周りの時間（思考）が停止する。

いち早く戻つて来た美琴が、

「だ・か・ら、人前で脱ぐなつて言つてんでしょうがー！」

と木山先生を注意し、次に戻つて来た白子ちゃんが、

「貴方はいつまでもみてないですよー！」

と言つて俺の目の前にレポートし目潰しをしようとするが、それをしゃがんで回避しながら、

「暑いんだつたらファミレスにいかね？」

と提案する。

（とあるレストラン）

「さて、同じ面積なのに水着は良くて下着は駄目な件についてだが…。」

という木山先生（木山先生）の問題提起に対して白子ちゃんと美琴は、

「「いや、そつちではなく。」」

突っ込むのに対して俺は

「多分目的が見せることが隠すことかじゃないですかね？」

とあえて（天然の）ボケに乗ってみる。

「だからそつちじゃないって言ってんでしょうが！」

美琴に頭を叩かれそうになるが、俺は頭をすくめてかわし、美琴の手はテーブルを叩く。

すると木山先生が窓にへばりついている、

「あれは君たちの友人かね？」

涙ちゃんとお花畑ちゃんを指差してきた。

「へえ、木山先生って脳医学の先生なんですか。はっ、白井さんの脳になにか異常が！？」

とお花畑ちゃんか言う。

黒い…。

しかしここはボケを重ねて、

「いやいや、美琴の戦闘狂っぷりが異常だから見て「ちがうわ！」「ごぶっ！」

と言おうとすると、美琴に背中を叩かれた。

「違いますの。幻想御手について聞きたいことがあったんですの。というわけで脳医学の専門家である木山先生に聞きたいのですが、音楽を聞くだけでレベルを上げるのはかのうですか？」

と白子ちゃんが（珍しく）まともな発言をする。

「ふむ、しかし形状が分からないとなんともいえんな…。」

と返す、木山先生。

「つてかお前が犯人だろ、という言葉が喉の奥までせりあがって来たが何とかのみこんだ。」

「ああ、それなら「幻想御手の所有者は保護するつもりですの。」「  
「っつー！」

涙ちゃんが何か言おうとしているときに白子ちゃんに遮られる。

「幻想御手の使用者は昏睡状態になるっつー未確認情報もあるし、それを鵜呑みにしたバカどもが暴れるかも知れないしな。まあ、俺から言わせてもらえば、そんな良くわからん機械で一気にレベル上げたのに死ななかったことが奇跡っつても過言じゃねーとおもっぞ？」

と最後に俺が締めると、木山先生が

「やはり君が言うと言得力があるな。」

と言ってきた。

この人俺が第6位つてばれたくないってこと理解してんのか？

という感じで、少しイラッときたので、

「ケンカ売ってんのか？糞ババア。」

ついついケンカ腰になってしまった。

「そういったつもりは無いのだが、君の気分を害してしまったのなら謝ろう。」

「神野先輩、落ち着いてくださいですの。ところで、木山先生貴女に幻想御手事件の協力を依頼したいですの。」

と俺を落ち着けて、木山先生に事件解決の協力を依頼する。

おめでとう、これで事件は迷宮入りしたも同然だ！

だって、捜査に協力している人が犯人だもん。

少なくとも目的達成までは誤魔化しきれぬだろ。

そんな感じで、何となく解散になった。

美琴は何やら突然走り去り、白子ちゃんとお花畑ちゃんは支部に、涙ちゃんは帰宅で俺は付き添いである。

そんな帰り道。夏休み初日で最終下校時刻に近いということもあって道はそこそこ混んでいる。

俺は、

「ねえ、涙ちゃん。幻想御手出して。」

オブラートに包んだりせずいきなり本題に入る。

一瞬涙ちゃんの動きが止まったが、直ぐに戻り、

「や、やだなあゝ、秀也お兄ちゃん。あたしはそんなの持っていないよ？」

としらを切る。

「でもさっき、白子ちゃんに遮られる前、何て言おうとしてた？それに別に涙ちゃんを保護しようとかそんなんじゃないから安心してよ。」

と言って右手を差し出す。

「でも、これがあればあたしは能力者になれるの！秀也お兄ちゃんもあたしと同じ一無能力者（レベル0）なら分かるはず、自分への嫌悪感が！他人への嫉妬が！……秀也お兄ちゃんはそれを奪おうっていうの？」

と涙ちゃんは最後は消え入りそうな声で呟く。

それに俺は

「違う。俺は奪うんじゃない。変えるきっかけを作るだけだ。もしここで涙ちゃんから幻想御手を受け取ったとしても、次は携帯にでもダウンロードすれば済む話だろ？だから俺は涙ちゃんから幻想御

手を奪うことはできない。でもダウンロードする瞬間に考えるチャンスが出来る。もし自分が昏睡状態になったら誰か悲しむ人はいるだろうか？ってね。少なくとも俺は悲しむ。それだけは忘れないで。

┌

とだけ言い、俺は涙ちゃんから幻想御手を受け取り、丁度寮だったのでそこで俺たちは別れた。

そろそろステイルが来る頃だな。

└上条宅前┘

端から見たら全く異常が無いようだが、ステイルの思考を読んでいる俺に人払いは通用しない！

よって俺には当麻の寮が炎上しているのが見える。

能力者が魔術師と戦うとバランスうんたらの問題があるから、能力で戦わないがばれない程度に能力を使っても問題無いと思う（思考を読むなど）。

そんな感じで当麻のいると思われる廊下に一気にジャンプする。

「風紀委員だ。取り敢えず当麻、ここは俺に任せろ。お前はその子連れて先生のところに行け、その人なら魔術使えるから。」

とアドバイスする。

すると当麻が、

「でもそうしたらお前が……さっさといけ。こいつ程度だったら俺で十分だ。」……分かった、気を付けるよ秀也！」

そう言つて、インデックスを背負つて階段を降りようとするのをスタイルが、

「逃がすか！灰は……がっ！」

炎剣で邪魔しようとするのを殴つて邪魔をする。

「お前の相手は俺だ、FORTIS931。さっさとインケンティウス魔女狩りの王出せ。」

と俺が挑発すると、スタイルは一瞬驚いた顔をするが、直ぐにやけ顔になり、

「僕に魔女狩りの王を出せと言つたことを後悔させてやる。世界を構築する……ぐふっ！」

途中詠唱が長すぎてついつい足が出てしまった。

「あーすまん、つい足を出してしまった。悪いけど手も足も出さないからもう一度詠唱してくんね？」

とお願いしている内に、

「……我が身を食らいて力を為せ、魔女狩りの王！！その意味は『必ず殺す』。殺れ、魔女狩りの王！」

やっと来たよ魔女狩りの王……。

こいつがいなきゃ、『ステイルを魔女狩りの王で焼いちゃおう大作戦  
！！』が実行出来ないからな。

そんな訳でまず俺は魔女狩りの王に突っ込む。

それで魔女狩りの王が持っている十字架が俺に降り下ろされる前に、  
寮の外に飛び降りる。

……と見せ掛けて、手すりに掴まって寮の中にジャンプする。

たまたただジャンプするだけじゃなく、そのままステイルの背後を  
とって。

そしてステイルが呪文を唱える前に、蹴りで押し出して魔女狩りの  
王に突っ込ませる。

しかし残念ながら魔女狩りの王は主人を焼くことは無く、ステイル  
に消されてしまった。

……本当に残念。

ステイルがこつちを睨んで何やら唱えようとするが、もうあっちの  
長すぎる詠唱に付き合っただけやる必要はないので、

「黙れ。」

と一言いい、ステイルの顎をぶん殴り気絶させる。

顎の骨が粉碎骨折したが、気にしない。

多分神裂がどうにかしてくれる。

そう思い、ステイルを放置して小萌先生の家に向かう。（能力を使  
って調べた。）

第9話 武装無能力者集団と魔術師（後書き）

感想評価誤字脱字の指摘ごんごん待ってます！！

第10話 魔導書と頭痛と魔術師の超能力者（前書き）

今回は神野が魔術の知識を得る回です。

多少（いや、かなり）自己解釈が入っていますが、司狼神威さんの疑問にお答え出来ると思います。

納得していただけるかは別ですが…。

そして神野のやっていることがかなり横暴……………。

そんな第10話ですm（——）m。

## 第10話 魔導書と頭痛と魔術師の超能力者

「神野先輩、さっさと仕事をしますの。」

今俺は小萌先生の家に向かおうとしていたのだが、何故か当麻の寮の前にいる。

どうしてこうなったのだろうか？

（数分前）

さっきステイルを軽くボコった（イノケンティウス）魔女狩りの王のせいで左手が軽い火傷になった。）俺は警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントが来る前に小萌先生の家に行こうと思ったが、

白子ちゃんから電話で、

「神野先輩、第7学区のとある寮で火事ですの。風紀委員にも応援要請が来ているので、直ぐに来てほしいですの。」

と命令ラフコールがあった。

それに当然逆らうことは出来ず、こうして現在に至る。

しかも今俺たちがやっている仕事は、

「はい、こっから先は危ないから入らないで下さい。」

そう、野次馬共を現場に入れないようにすることだ。

そんなこと自分たちでやれよ。  
アンチスキル  
最近警備員は人数不足らしいけど、この時間帯（大体7時過ぎ頃）  
ならそのくらいの人員確保出来るだろ。

つつーかもう火消えてるし、絶対俺たちは要らねえだろ。

と心の中で悪態をつきながらも一応笑顔で野次馬共に対応する。  
そんなこんなでやっと仕事から解放されたのが8時半過ぎである。

「じゃあ、白子ちゃんお疲れ。」

と言って俺は色々あったがゆっくりと小萌先生の家に向かう。

（小萌先生宅前）

ピンポン

俺は小萌先生の家のインターホンを鳴らして待つ。

するつ、

「はいはい、新聞の勧誘ならお断りなのですよー。」

と下から合法ロリか話し掛けてきた。  
こもえせんせー

開口一番がそれは無いだろう…。

ここであらなくてもいいが俺のやらなくてはいけないことがあるの

で、直ぐに本題に入る。

「あー、すみません。ここにきた上条当麻と白いインデックスっていうシスターの知り合いなんですけどあつ、別に今当麻に確認とってもかまいませんよ。その二人に用があるんで入りますね。」

と相手の確認も取らず（当麻の知り合いかどうかも確認させてない）、勝手に中に入る。

「よつ、当麻。無事みたいだな。インデックスも大丈夫か？」

と中（相当汚い）から当麻を見つけ、安否を確認する。

「ああ、俺は問題ねえ。インデックスも小萌先生のおかげで傷も治った。そんなことよりお前は無事だったのか？なんつったって相手はかなりの魔術師だったみたいだし。」

と当麻が今度は俺の安否を確認してくる。

「多少火傷を負ったけど圧勝だったな。事情があつて本気でいけなかったけど本気でいったら、あいつが何百人集まっても文字通り秒殺できるしな。」

俺はと自慢気に話す。

「そつ、そうか……。ところで秀也はどうしてここに来たんだ？」

と若干引いている当麻が話題を変えようと聞いてくる。

「インデックスの無事の確認と後やらなきゃいけないことがあるか

らな。」

俺のやらなくてはいけないこと。

それは十万三千冊の魔導書の読み取り。

俺が神に頼んだからには確実にやらなくてははいけないことだろう。そして十中八九魔導書の毒にかなりやられるだろう。

取り敢えず完全には無理だろうが能力を使ってその毒を解析、無効化し廃人にならないようにしなくては。

俺能力者なのになんで魔導書の知識を欲しがったんだろう？

十四年前の死んでる俺にそれを聞きたいわ…。

確か調子に乗ってただけのような気がするが。

考え事はここまでにして、早く取り掛からねば。

「取り敢えず当麻、今から絶対に俺がやらなくてはいけないことをするから、俺がどんなに泣こうが喚こうが叫ぼうが絶対に止めないでくれ。下手に止められると死ぬかも知れないから。あと、小萌先生。本当に申し訳ないんですが、今日はこれでどこかのホテルに泊まって下さい。」

と言って十万ほど小萌先生に渡す。

「な、何言っているのですかええっと、「神野です。」何言っているのですか、神野ちゃん！先生は子どもからお金は受け取りません！」

と抵抗するので、

「じゃあ、使わなかった分は返して下さい。あと、多分この後うるさくなると思うので、ここでは寝れないと思いますよ。」

と俺が言うが、まだ納得のいかなさそうな顔をするが、当麻が

「先生！神野がどうしてもそうして欲しいって言ってるんだ。だから出来ればこいつの言うことを聞いてくれ！」

と頭を下げてくれた。

当麻、あなたはどんだけいい人なんですか…!?

相手が何をするとか全く言っていないのに信用してくれるなんて。

当麻のおかげで小萌先生になんとか退場してもらい、今この部屋にいるのは俺と当麻とインデックスの三人だけだ。

ちなみに言ったら止められるだろうから当麻に何をするかは言っていない。

すつつと深呼吸をし、気持ちを抑える。

「最後にもう一回言っとくけど、何があっても絶対に邪魔をしないでくれ。」

と最後の確認を取る。

当麻も、

「分かった。」

と慎重な面持ちでこたえる。

さてはじめるか…。

まずはインデックスの頭の中を読み取っていく。  
まだ魔導書には関係のない記憶である。

……しかし本当に一年分の記憶しか無いな、こいつ……。

だめだ、関係のないことを考えては。

集中、集中。

そして魔導書の知識を読み取り始める。

すると強烈な頭痛に襲われるが、直ぐに解析し無効化する。

だが、魔術を完全には解析出来ず、未だ頭痛に襲われている。

そして読み取った魔導書が一冊、また一冊と増えていく度に頭痛も酷くなっていく。

一万冊を越えたところに、耐えきれず叫んでしまう。

しかし能力を使ったとはいえ一万冊まで耐えたのは凄いだろう。  
確か原作でインデックスの魔導書を読み取るうとして、一冊でボロボロになっている人がいたと思うし。

「あああああああ……！！！！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！

血を吐いているのが分かる。

目から血の涙を流しているのが分かる。

身体中から血が吹き出ているのが分かる。

俺がそんな痛みと格闘していると、

『元気にしておるかの？』

神が話し掛けてきた。

『本当は原作前にこの知識を得るはずだったんじやが、何故か失敗しての。埋め合わせにお前さんが反動無しで魔術を使う方法を教えてやるわい。』

『まず、魔術師と能力者は頭の回路が違う。だから能力者が魔術を使うと反動がくるのじや。つまりお前さんの能力で頭の回路を魔術師のものに変えてしまえば反動無しで魔術が使えるというわけじや。』

『しかしその間は、超能力が使えんがの。』  
と最後に付け加える。

確かにいい情報だった、それは認める。  
だけど今話し掛けてくんなああああ！！  
気が散るだろうがあ！！

そう思った瞬間より強い頭痛とより大量と吐血が俺を襲う。

結局、魔導書との格闘は朝まで続き、廃人にならずに済んだ。

あと、魔導書の読み取りが終わった後、頭に魔術的結界を張ったら頭痛も吐血もぴたっと止んだ。

もともと、血を吐きすぎて、顔面蒼白な貧血少年が一人出来上がってしまったが。

取り敢えず当麻に何をしたのかを教えたら、多少怒られたが次ぎは相談してくれと言われて済んだ。

また、小萌先生から十万ぴったり返してもらい、説明をしなくてはいけないかと思っただが、小萌先生は忘れている様なので黙っておいた。

そして俺は何事も無かったかの様に風紀委員第177支部に向かった。

第10話 魔導書と頭痛と魔術師の超能力者（後書き）

感想評価誤字脱字の指摘どんどん待ってます！！

佐天「ひっさびさに次回予告です。（カンペを見ながら）ええつと、魔術の知識を得た秀もお兄ちゃんだけど今回は魔術も超能力も使わず無茶な戦い方で不良たちに挑む！って言うか魔術って何！？」

神野、ゆっぴー「第11話風紀委員と不良と光の能力者」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8143z/>

---

とある無敵の多重能力者

2012年1月6日09時49分発行